

# 痴呆性高齢者を世話する家族の介護継続・介護肯定要因の検討

——Yさんのデイサービス連絡帳の分析を通して——

関谷栄子 落海文子 新井幸恵\* 柴生田美里\*\*

## 1 研究動機

筆者等は、痴呆性高齢者への介護が、介護保険アセスメント様式や介護過程様式など、医学モデルを受け継いで、問題点の抽出から始まるプロセスをとる事に常々大きな疑問をもってきた。確かに痴呆性高齢者とのかかわりには多くの困難があるが、先ず困難を数え上げるアセスメントから出発する方式は、人間の尊厳や可能性を探究しようとする指向にゆがみが生ずる事を懸念してきた。介護教育の分野ではこの歪みが学生の利用者理解や介護観にまで影響する事を懸念する声も多く、小櫃ら（2002）の研究が緒についたばかりと言える。

こうした経過の中で、痴呆性高齢者自身を、肯定的な感情で受け入れる介護の手掛かりを模索していた時期に、埼玉県のデイサービスでKさん（83歳女性・アルツハイマー型痴呆症・元助産婦）とその介護者Yさん（48歳・三男の妻）に出会い、公表の許可を得て1988年より15年間にわたるお世話に関する記録である「連絡帳」12冊分を受け取った。Yさんはデイサービスへの連絡帳に毎回200～300字の内容を職員に向けて書き綴っていたが、これはKさんを取り巻く一家5人の暮らしを織り込んだ介護の様子が、ユーモアを交え、率直に表現された貴重な記録であり、また痴呆性高齢者の生活行動を観察したものでもあった。Yさんは結婚前に保育士として働いた経験があって、子供の成長・発達を見守る職業経験をもち優れた観察力を培っていた。

Yさんは連絡ノートの記事について次のように述べている。

「自分の感情を抑えていららする時、何故自分ばかりがこんなに大変な事をしているのだろうと落ち込み、孤独な気持ちになってしまいます。辛い時の気持のままを、応えを求めないで自分の気持の爆発の場所として連絡帳に書きました。嫁の意地悪な目で姑の悪口を書いていると、姑の行動も少しは余裕を持つてみる事が出来、明日はこれを書いてや

---

Eiko SEKIYA, Fumiko OCHIUMI, Yukie ARAI, and Misato SHIBŌDA : Investigation on the factors affecting to care affirmation and its continuation for elderly dementia.—— through analysis of the memo written by Y, a day service member of the family

•Sachie ARAI : 十文字学園女子大学

••Misato SHIBŌDA : 狛江市社会福祉協議会非常勤

るぞと楽しみにもなりました。」

このようにYさんがつづった、嫁として気取らない、しかし丁寧な介護生活記録を分析して、嫁姑関係も悪く、徘徊や暴力・介護拒否などのある困難な痴呆性高齢者を世話しつづける事が何故出来たのか、介護継続・肯定要因を探る資料となると考えた。

## 2 先行研究

1980年代より、痴呆性高齢者を世話する家族介護者の虐待や燃えつきが知られるようになり、介護負担感の研究（そのストレスフルな実態，要因分析，解決技法，支援方策）などが模索されてきた（前田1984）。1990年代後半より，介護負担感のみではなく困難な条件にもかかわらず家庭での介護を継続する要因，肯定する要因の研究が行われてきた。櫻井（1999）は介護状況への満足感，自己成長感を挙げ，陶山らはこれに加えて高齢者との一体感を挙げこれにいたる双方の関係のよさを指摘している。

## 3 研究目的

介護肯定感の形成には多様な要因が相互に影響し合っているが，筆者等は痴呆症を生き抜いたKさん自身の中に潜む「介護継続・肯定要因」がどのように現れていたか「連絡帳」の記載を基に検証したいと考えた\*。その中で家族介護者にとっての，痴呆性高齢者自身に由来する介護継続・肯定要因を明らかにし，介護支援の手掛かりを得たいと考えている。

## 4 研究方法

介護者Yさんのデイサービスの連絡帳に記載された12年間分の記述から，痴呆性の障害を持つKさん自身に由来する介護継続・肯定要因を抽出する質的研究様式をとった。カテゴリーの抽出にあたっては陶山ら（2004）の介護肯定感の第3因子「高齢者との一体感」を参考にした。

全介護期間を3期に分けて考察した。

- |       |         |              |       |
|-------|---------|--------------|-------|
| I 期   | 痴呆症状発現期 | （1988年～1992年 | 計4年間） |
| II 期  | 激しい徘徊期  | （1993年～1997年 | 計5年間） |
| III 期 | 臥褥期     | （1998年～2003年 | 計6年間） |

---

\* この様な様式の研究にあたって倫理的配慮が必要である記録の分析にあたっては，その趣旨を伝え，Yさんの了解を得て行った。Kさんの不利益になると思われた場合には中止しても良い事を伝え，又本研究以外には使用しない事を伝えた。

## 5 事例紹介

### 事例の概要

Yさんは43歳から、Kさんの激しい徘徊期も含め13年間のデイサービス利用を含め、15年間にわたり義母の在宅介護を続けた。Kさんは最期の1ヶ月間は医療機関に入院し肺炎により亡くなった。(1988年～2003年、Kさん73才から88才まで、表1)

### Kさんのプロフィール

Kさんは助産婦として働く中で結婚、三子をもうけたが夫は第二次大戦中に戦死した。T市内にて助産院を営みながら女手ひとつで子供を育てたのち、一人暮らしを続けていた。徘徊などの痴呆症状がではじめて、同市内の三男宅に引き取られYさんの世話を受けるに至った。三男45才、Yさん43歳、Yさんの長女13歳、次女9歳であった。もともとYさんとKさんは同居を解消した経験があるほど折り合いが悪く、良い関係ではなかったが三男家族の関係性のよさや近隣地域、又デイサービスをはじめとする社会的サポートに支えられてYさんは、15年間の介護を全うした。

Kさんの徘徊は電車を使つての行動等もあり埼玉県T市を中心に10Km離れたH市、20Km離れた東京都A区と広がり、家族を心身ともに疲労困憊させていた。当時は痴呆症の介護も社会的には手探り状態にあり、Kさんの対応困難な症状に対し特別養護老人ホームも医療機関もともに入所や入院を躊躇い拒んでいた。

徘徊は1988年より脳出血発症までほぼ6年間続くが、その後も介護拒否、暴言暴力は続き、Yさん一家は家族中がKさんの介護の混乱に巻き込まれ、Yさん自身も高血圧症、髄膜炎、自律神経失調症等を患いながらの介護であった。この間のKさんの疾病の経過、利用したサービスは表1の様である。

徘徊期が終わり、徐々に寝つくようになってからも、再々の肺炎、感染症の併発での入退院、又後半からは親族内の介護負担のトラブルを廻つての心労等、介護上の負担は増している。又重度化するにつれて増えてゆくサービス活用に関わる気遣いやストレスも増したものと推察されていた。

表1 Kさんの疾病経過および利用したサービス

西暦	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
時期区分	Ⅰ期			Ⅱ期			Ⅲ期									
出来事	三男宅へ転居			デイサービス開始			シヨーストステイ開始			死亡(7月)						

## 6 結 果

表2に各時期別に見た介護継続・肯定要因を示した。Kさん自身に由来する介護継続・肯定要因については以下の5つのカテゴリーを抽出した。

表2 連絡帳の記載にみる介護継続・肯定要因

カテゴリー	介護継続・肯定要因	内 容	期	連絡帳の記載例
1	痴呆になっても変わらない、本来のその人の力、その人らしさ 残存能力への気づき	母として、助産婦として、地域の生活者としての意識・技術・人間関係	I I II II II II	助産婦としてホームへ働きに行くつもりで通っています 「お母さんでないと夜勤できない」というと「よく働いたものだ」 露の皮をむいてくれ、米のとぎ汁で煮ると美味しいよと、教えてくれます 私がミシンを縫っていると、そばで自分のスカートを縫う真似をしています ナスを細かく刻んで洗面所、玄関に散らばす たけのこを風呂敷に包んでおいたものを見つけ、酒と勘違いしている。徳利と杯を見つけてこんなによいものがありましたと喜んでいいる。
2	むしろ、痴呆になったことから来る自由な人間性の発露、人間性の解放 エネルギーの大きさの発見	徘徊、暴力、暴言などでの自己表出 Sexualityの発見	I II II II II II	徘徊時、県道を信号無視で渡り、バトカーが呼ばれたり、もう有名人 電車でH市まで徘徊、叱るとまた徘徊に行く 「2階の女と別れて息子、孫と3人で暮らそう」 若い男の子とカラオケボックス、ツーショットでにっこり 娘の男友達に関心を持ち世話をやく 娘の赤いハイヒールを履きたがる
3	子供がえりの愛らしさ ユーモラスな、愛らしい存在に癒される	ユーモラスな言動や仕草 愛らしい表情やたたずまい	II II II	お蒲団全部掛けて寝ていて、まるでだるまのよう 人形を持って遊ぶ。この子はおとなしくて私に似ているという。 パジャマの上から娘の花柄のワンピースをきて袖だけ出す

			Ⅲ Ⅲ	朝になると私の顔を突っつきます 夫婦の寝室をのぞき息子の寝顔を眺 めている
4	病状の改善・安定 健康な状態の喜び	緩やかな痴呆症状の進行 問題行動の克服 他人からの良い評価 生きているという価値の 確認	I Ⅲ Ⅲ	今週は穏やかで助かっています 隣の人に穏やかになったねと誉めら れました 朝大量の便が出るということは健康 な証拠です
5	お世話への良い反応に喜 んだり、苦労が消えたり する事の発見	お世話を喜んでくれる 世話により状態が改善す る	Ⅲ Ⅲ Ⅲ	立位をとらせるとシャキットした顔 になります ビールを飲ませると嚥下がよくなり ます デイサービスから帰った日は目が覚 醒しています

## 7 考 察

これらのKさん自身に由来する介護継続・肯定要因は単独でおこりうるものではなく、家族介護者の当事者との関係性、経済的安定性、人間への関心の高さ、公私のサポート条件などの要素があいまって現れると考えられる。

換言すれば、良質のサポートや家族の資質などが温かく噛み合えば、痴呆性高齢者の持つ「力」を肯定的に見つめる事が出来、このことが介護へのエネルギーを湧きたてる効果を生み、困難な介護を引き受けようとする意志を継続させる。

### —— 痴呆性高齢者の能力発見

ある日突然襲ってきた痴呆性高齢者との付き合いの中で、葛藤を抱えつつ痴呆があっても人間的な感性が豊かにあることが表現できる能力の発見、思いもよらない人間的な魅力に基づく、予測できない“あっぱれな言動”があることへの驚き、子供帰りしたかのようなユーモラスで憎めない愛らしさ、痴呆症になって初めて表現されてきたsexualな言動の発見と驚きや感心、更にターミナル期へ近づく程に小さな好転や、良い兆し・反応などがYさんを励ました。

### —— 介護の憂さ晴らしとしての表現

Yさんは、日々のKさんの日常生活行動を連絡帳に記入しつづける事で自らの気持ちの表出の場となった。初めは痴呆症の行動について「悪口を介護スタッフに言いつけて鬱憤を晴らす手段」としていたのだが、次第に自己の介護に関する客観的な観察記録となっていった。書くことを通して、痴呆症の行動特長に気づき、その人との距離がなくなっていくプラスの感情を自覚するようになった。介護者がゆとりを持ち高齢者に接することにより高齢者もまた落ち着くことがわかる。介護者が痴呆性高齢者を見る視点を変えてみると、問題行動には意味があり、人間であることを踏みこたえて守ろうとする自己防御のありよ

うであることに気づくのである。痴呆症からくる「問題行動」の肯定的側面を関係者間で共有することは、援助の手掛かりをみいだす際に有効な鍵となる。

—— スタッフのサポート

Yさんが連絡帳で介護負担を介護スタッフに語りつづけることにより、職員の好意的なスーパービジョンが始まっている。スタッフはYさんの目を通して語られるKさんの家庭での行動に対して支持的に受け止め、肯定的な評価を行っている。一方ではYさんの介護の努力を全面的に認め、かつまたYさんからKさんの介護を学ぼうとする支持的働きかけがある。スタッフは介護の困難性に対して共同的に取り組もうとする。その結果Yさんの介護姿勢にも、肯定的な意味づけがさらに加えられることとなった。

以下介護の細部にわたり考察する。

(1) 家族介護者と痴呆性高齢者との関係性（Kさんをめぐる家族の関係）

Kさんは、息子の家族と同居し始めても、介護者である嫁のYさんの存在を無視するような言動があった。Kさんは息子（Yさんの夫）をめぐってYさんとは緊張関係にある。Kさんが嫁を「2階の女」と呼ぶことで「嫁」の存在を無視するかのような言動がみられる。Kさんが孫に、「2階の女と別れて自分たちだけで暮らそう」という介護者の気持ちを無視したかのような暴言が見られる。しかしYさん自身がゆとりを持って状況判断し、Kさんの言葉の裏を洞察し行動の意味を代弁している。Kさんが息子を愛し息子との暮らしをのぞんでいることを理解している。「Kさんが夜、夫婦の寝室に入り息子が眠っている様子を眺めていく」などの行動をとるときには、「息子への執着心の表れ」として受容している。YさんはKさんの行動に対して、暖かくまたユーモアあふれる観察眼でKさんの気持ちを表出している。Kさんの行動に対して好奇心をもって観察しKさんが、息子に対する思いを容認し、見守り続けている。

YさんがKさんの世話を徹底して受け入れた背景には、夫から依頼されたためであり、夫への愛の実証的行動である。さらに姑の痴呆症が進み、激しい徘徊のため保護者として遠方まで迎えにいかねばならないなどの介護ニーズが重度化していくにつれて、夫の協力なしには介護負担を担うことができなくなった。徘徊中のKさんを夫婦で探すなどのKさんに対する共通理解があったからこそ、協力して介護負担を分かち合うことができた。介護に関する家族の協力があることも介護継続の原動力になっている。痴呆性高齢者との関係性は痴呆症の理解そのものにも影響されるといわれている。痴呆症状に対する家族間の問題意識が一致していることは介護継続要因の必須条件である。

Kさんの痴呆症状に対するYさんと夫との理解の一致のもとで、Yさん、夫、Yさんの娘の家族全体の協力体制があることが介護持続要因となった。

Kさんと孫との関係も重要である。Yさんは娘（Kさんにとっては孫）とKさんとの関係にも気遣い、はじめは娘（孫）に忍耐を求め、Kさんのことで娘（孫）がいやな思い

をしても我慢をさせていた。しかし娘に持病の喘息の悪化傾向がみえたので、それではいけないと思うようになった。姑に対して、娘が正当な場合にはきちんと口答えをさせて、娘に自己表出できるよう対等な関係の確立に配慮した。孫もKさんとの関係作りを通して喘息の改善がなされ成長した。Kさんを「おばあちゃん、かわいいの。」というように痴呆症の家族を受け入れるようになった。家族構成員すべてが自分の気持ちを表現し、各自の基本的な生活権の保障がされることにより、家族関係が安定した。特定の介護者の介護負担が増すなかでは、他の家族構成員にひずみが生まれる場合には、介護に破綻が生じる場合がある。介護ストレス解消だけにととまらず、よい介護関係を構築していく努力もされていた。

(2) 子供がえりの愛らしさ、失策を容認する（ユーモラスな、愛らしい存在に癒される）

痴呆症がもたらすKさんのほほえましい言動についても、その人らしい愛すべき人物像として描き出すことにより、痴呆症におかされてもなおいっそう人間的魅力が増していく。記録からは、たとえ問題行動を繰り返してもそれを容認して、Kさんを支援したい思いが強くあふれている。

例を挙げると「パジャマの上から孫の花柄のワンピースを着ている。」「娘の赤いハイヒールをはいている」「朝になると寝ているYさんの顔をつついて起こす。」などの痴呆症特有のほほえましい動作や問題行動が観察されている。

YさんはKさんの痴呆症状をよく観察し、そこに表された「よりよく生きよう」とする潜在能力を見出そうとする視点がある。

非難めいた表現でなく、好奇心いっぱいで見守っている様子である。その理由は、Yさんには職業的保育者として子供の行動を客観視する経験をもっていたからではないかと考える。

子供が多くの失敗を経験しながら成功に導かれる過程を通して自らの生きる力を獲得していく。その学習過程をみまもる経験をしてきたことによるのではなかろうか。失敗をかさねるたびに、そのつど周囲の大人は子供を助けたり、ほめたり、励ましたりして成長発達を促し、人間の成長過程をみまもっている。

子供への接し方がそのまま痴呆性高齢者にも適用できるわけではないが、痴呆性高齢者が生活上の行動に失敗したときの介護者の受け止めかたや、おおらかに見守っている気持ちの持ちかたなどは応用できる。失敗を成長欲求の当然の過程ととらえることにより、介護者は高齢者の失敗に対してポジティブな行動として理解し、その人の生活への意気込みによるものとおおらかに対応をすることができよう。失敗を許容することにより介護者との関係悪化を防止できる。

Kさんの行動は、むしろほほえましいものが多く、YさんたちはKさんの自然な行動を愛すべき行動ととらえており、むしろKさんから癒しをうけていると考えられている。



結果的にはKさんは行動の制約を受けることがなく、痴呆症状があってもものびのびと過ごすことができた。

これとは逆に、「今までできていたはずなのに、なぜできないのか」という周囲の失望や怒りに満ちたマイナス評価が介護者の表情や言葉の端ばしに現れるとき、痴呆性高齢者は雰囲気を感じ取って不安になり、周囲への不信感を抱くことになる。そのため却って問題行動を激化させ被害妄想的な精神世界へ迷入させる恐れもある。多くの痴呆症者の家族がよく述懐をしている「年寄り叱るな。行く道じゃ」という俗なことわざがそれを物語っている。

(3) むしろ、痴呆になったことからおこる自由な人間性の発露、人間性の解放（エネルギーの大きさの発見）

Kさんの徘徊は地域内で公認されている。これは親族や地域社会に対する積極的受け入れのニーズについての問題提起である。家族にとって痴呆性高齢者の発症は、近隣に隠しておきたいことである。まして病前、地域の名士として活躍していた人ならば、そのころの栄光が傷つくことを惜しんで、痴呆症の発症を隠すために痴呆性高齢者を家庭内に閉じ込めたいと思うことは理解できる。

Yさんは反対にKさんの過去にこだわらずに、Kさんの行動を束縛せず徘徊を自由にさせた。Kさんは「散歩」の途中で行き付けのうなぎ屋に寄り、好きな酒を飲んで帰ることができた。地域の随所に顔なじみの人が見守る中で、Kさんは気ままに町内を徘徊する。時にはガス会社の巡回車や交番が、Kさんを保護してくれる。元気なところに助産婦として多数の母子の健康を守った地域の有名人であったことも有利であった。Kさんにとっては、あたかも新生児の訪問指導をするかのように、見知らぬ家に入りこんだり、見知らぬ人を自宅に招きいれ交流している。他人との関係性のよさもKさんの人柄によるものである。Kさんの自由な行動は「天下ごめん」、「天晴れ」とも思える行動である。痴呆症を患ったことにより、理性や知性に縛られず、自由人として思うままに行動することができることは痴呆症者の特別な能力といってもよい。

Kさんの徘徊などの重度化により、Yさんが健康を害することになり、家族が介護負担の危機に陥った。そのとき、Yさんは介護問題を自分だけで背負うのではなく、問題を公表する方向に考え方を切り替えて、地域住民の力に信頼を寄せたのである。テレビの取材にも応じたためさらにKさんは有名人となった。

その結果Kさんは自由に徘徊し、地域の人たちがKさんの安全をみまもり所在を連絡してくれたりした。町ぐるみの見守り体制ができる中で痴呆性高齢者が自由に安全に徘徊できる地域ケア体制が出来たのである。この点に今後の地域ケア体制拡大の鍵がある。

Kさんのもうひとつの積極的な側面は、性に関するニーズの解放である。

若くして夫と死別したKさんは、その満たされなかった異性への関心を痴呆症になっ

たことにより、周囲への気兼ねを感じることなく、生き生きと満喫して楽しんでいる。

「孫のボーイフレンドが遊びに来たときは、孫をさしおいていそいそと世話を焼く。」

「また近所の道路工事中、若い男性ガードマンに対しては笑顔で話しかけ、お茶を出すようにとYさんに指示する」などのほほえましい行動が見られている。異性に対する関心は年齢に関わらず潜在しているニーズである。Kさんの行為は「老いの楽しみ」として、もっとも尊厳ある人間らしい行為として見守られてよい。痴呆症になると社会の道德規範にはとらわれず、自由に性の欲求に従って行動できる。セクシュアリティは痴呆性高齢者にとって、人生の終焉期の生命に人間らしい輝きを加える美しい行為である。現代の高齢者にとっては性の欲求を自由に表出することは切実な課題であると思われる。周囲の理解と見守りにより、セクシュアリティに満ちた安定した生活を支援することが安定した穏やかな日常生活を支える要素になっている。楽しかった感情は残り、心の安定につながるので、セクシュアリティに関するケアはもっと重視する必要がある。

#### (4) 病状の改善・安定、健康な状態の喜び

第Ⅲ期には終末期が近づき、Kさんは臥床がちになり、肺炎を繰り返したり、誤嚥で入院するなどの変化がみられ、症状の変化に一喜一憂する様子が記録されている。Kさんの華やかな痴呆症状が次第に沈静化し、寝たきりに移行していく。行動範囲の狭小化により介護しやすくなるのは、「安心」ではある。その反面、生命力の衰退が確実に進行している。介護者にとっては「生命の不安」「別離への不安」があらたに出現する。この時期の介護者にとっての励みは、療養上の介護の繰り返しの中にも小さなよい変化を見出すことであり、その確認が翌日の介護を継続させる原動力になる。

Yさんとの共感、Kさんに対する介護目標の共有が介護スタッフの支援の鍵となる。観察力を鋭敏にし、Kさんの小さな好転を見出して、喜びを共有することになる。Kさんの終末ケアを準備しつつ、家族の意向をくみ上げて、介護の目標を共有し家族が達成感を感じられるように共感し励ましあった。死別のときが近づきつつある中で満足できる介護を全うすることができたのはスタッフと家族との共同作業による成果である。

#### (5) お世話への良い反応

お世話への良い反応に喜んだり、苦労が消えたりする事の発見も同じように介護の喜びを感じさせる要因となる。Kさんの酒好きが引き起こす行為もそのひとつである。Kさんの酒にまつわるほほえましい行為が多くある。

「ある日のこと、もらいものの『たけのこ』を風呂敷に包んでおいたところ、Kさんは酒をもらったと思い込み大喜びした。中身が『たけのこ』とだとわかり、がっかりした話」「酒の徳利と杯を見つけて『こんなによいものがありましたよ。』とYさんに見せに来る話」「水分補給の際、ウーロン茶を飲むときはむせるのに、ビールやチュウハイ

だとむせずにスムーズに飲める。デイサービスにビールを持っていく話」など、Kさんのほほえましい一面として、家族の日常生活を彩る楽しい話題となっている。

痴呆になっても変わらない、本来のその人の力、その人らしさ、残存能力への気づきも見られる。たとえば、ショートステイに誘うときは、「夜勤のお仕事を頼みます。お母さんでなければだめですって。」と声をかけると誘いにしたがってくれる。「デイサービスの送迎運転手をお医者さんと勘違いして丁重に挨拶する」などKさんの痴呆症状からおこる勘違いをうまく活用している。このようなユーモラスな対応をみると痴呆性高齢者との接し方には相手の思いをうまく引き出し、そこに機転よくかみ合って働きかけることが重要であることがわかる。これらは痴呆性高齢者援助技術として活用出来ることが多くある。

Yさんの記録には、読むものの笑みが、思わずこぼれるようなKさんという個人に対する暖かい関心が見られる。Kさんの介護をするときは、Kさんの豊かな生活史に裏付けられた日常生活の行動特徴を知り、援助する鍵を見つけることである。痴呆性高齢者の引きおこす問題行動は見方を変えれば多くの援助の鍵が隠されている。援助の秘訣の宝庫である。

痴呆性高齢者であっても日々成長する力を秘めており、その力を見出すのが優れた介護者である。それにはどのような状況にあっても、その人の人としての能力を信じその潜在力を引き出すことが必要である。そのためには介護者の観察眼は大切である。一人よがりにならないように、プラス評価を的確に行い、そのままの生き方でよいというメッセージを送り続けることが必要である。

介護を受ける高齢者は人としてぎりぎりの瀬戸際にありながら人間としての尊厳を保持し、愛すべき人間として生存しつづけている。暖かな人間関係の中で介護者に対して投げ返してくる関係性を作り上げる力が、介護を継続させる原動力になっていると考えられる。

Kさんをめぐる家族や地域の人たちとの間に生じたドラマチックな出来事は在宅ケアのアクセントとなり思い出として関係者の信頼関係を深める際の共通の財産である。

介護を全うし終えた後も、介護負担の苦しみだけでなく、Kさんとのさまざまなほほえましいエピソードを思い出して笑いやおかしさをよみがえらせる機会が必要であった。「嘆きのケア」は遺族へのケアとして重要である。Kさんが残してくれた思い出を暖めつつよいYさんとの関係を続けている。Yさんの喪失感を軽減するように支援することが重要である。Yさんは介護体験を語る場を得て自己の「嘆きのケア」としている。

#### (6) 公私のサポート条件などの要素

痴呆症の介護を担うのは負担が大きい。困難な課題に立ち向かうためには、公的私的サポートの活用が不可欠である。デイサービス職員は物心両面からサポートを行った。

またYさんの介護姿勢を共感的に支持している。介護者の自主性を尊重し、自分流の介護を貫くことができるよう支援し、Yさんの介護意欲の持続を支えた。

デイサービスの職員はKさんについての率直な心情を吐露したYさんの記録を読み感想を書くという行為を通じて、Yさんの立場を理解し、Yさんの態度に共鳴している。Yさんのケアから学ぶ姿勢を示している。介護スタッフは家族の介護方針を支持し一致した方針のもとで介護している。Kさんの生命を保護し、生活を活性化させたのである。飲酒習慣の許容や、徘徊の容認、などは専門的立場からは偏った価値観である。しかし多様な価値観を容認する立場で、デイサービスの職員たちは、Yさんの介護を支援した。その結果、Kさんから多くの可能性を引き出すことができた。Yさんからも介護に関する多くの学びがあった。徘徊には、「過去の仕事との関連があるかもしれないこと、自分の家にいても心が休まらないことがあると徘徊を誘発すること」などそれなりの理由があることも理解することができた。

介護肯定要因の検討に当たり、豊かな感性をなくすことなく介護の気力と体力を持ち続けることができたのは、Kさんのもたらす痴呆性高齢者としてのほほえましい行動特徴と人間性、介護者Yさんの受容的人間性、家族への愛情、家族のよい人間関係、それをみまもり支援した援助者の存在、などの多様な要素がダイナミックに作用していることがわかる。

## 8 まとめ

介護を持続させる要因は、要介護者と介護者との確かな人間関係、介護を楽しめる楽天性、介護体験を文字として表現し客観視できるゆとり、その結果得られる介護をまっとうできる気力と体力の温存、専門職を含む地域の支援体制などの環境条件がフルに有効に活用されて状況が持続できることが必須条件である。

また痴呆症状を見極め、その人の人間性や過去の栄光、潜在している機能の活用へと導き出すことにより、家族の介護負担を軽減させ、楽しい介護体験として日々の介護を全うできる原動力になる。そのためには痴呆性高齢者に愛情をもって観察し、受容し、共感し、ともに成長しようとする共生思想が重要である。

## 9 今後の課題

介護者を支える人間関係が円滑に維持強化されるための方法論、家族が破綻した場合の代替資源、痴呆性高齢者本人の愛すべき人格維持のための援助などの個別の課題をさらに深めていくことである。

痴呆性高齢者の能力はまだまだ引き出せる可能性がある。潜在能力を引き出すことにも

介護者は貪欲であるべきである。生活史をよく知る痴呆性高齢者の家族の介護力には無限の可能性はある。さらに分析例を増やして実証したい。

### 参考文献

- アリスモーガン著 小森康永, 上田牧子訳 (2003) ナラティブセラピーで何? 金剛出版  
 E.メーリン, R.B.オールセン (2003) デンマーク発痴呆介護ハンドブック ミネルヴァ書房  
 小澤勲 (2003) 痴呆を生きるということ 岩波新書  
 小櫃他 (2002) 「介護過程の教育方法を探る」第9回介護福祉教育学会  
 高齢者痴呆介護研究・研究センターテキスト編集委員会編著 (2001) 高齢者痴呆介護実践  
 講座 第一法規出版KK  
 小林敏子編著 (2000) 高齢者介護と心理 朱鷺書房  
 櫻井成美 (1999) 「介護肯定感が持つ負担軽減効果」心理学研究70-3  
 陶山啓子他 (2004) 「家族介護者の介護肯定感の形成に関する要因分析」老年社会科学  
 ナオミ ノーマン著 (2000) バリデーション 筒井書房  
 久田恵 (2003) 母のいる場所  
 前田大作 (1984) 「障害老人を介護する家族の主観的困難の要因分析」社会老年学  
 室伏君士 (1983) 痴呆性老人の理解 金剛出版

せきや えいこ (介護学)  
 おちうみ ふみこ (介護学)  
 あらい ゆきえ (社会福祉学)  
 しぼうだ みさと (介護学)